

梁啓超が見いだした潘耒「徐霞客遊記序」と李慈銘「越縵堂 読書記」について

—清人の徐霞客評 その一—

薄井俊二

序

本稿は、清人潘耒の「徐霞客遊記序」の訳注を行う（第一部潘耒「徐霞客遊記序」訳注篇）とともに、潘耒及び清人李慈銘の徐霞客評について検討する（第二部論考篇）ものである。

第一部 潘耒「徐霞客遊記序」訳注篇

*訳注説明

- 一、底本は、潘耒「遂初堂文集」（巻七）所収のものとした（ウェブ「中國哲學書電子化計劃」で公開の写真版）。紙幅の関係で原文の掲載は省略した。
- 二、訳は口語訳とした。
- 三、内容から七つの節に分け、小見出しを附したが、これ

らは訳者が行ったものである。

四、語注を付したが、本論の注と区別するために、訳注の語注については【】で番号を示した。

*訳注

【第一節】「遊」について

文人や達士には、好んで「遊」を語る者が多い。しかし「遊」は軽々しく語ることができないものではない。

俗世間から離れた心情の持ち主でないと、山水を心から楽しむことはできない。景勝の地を渡り歩く頑強な肢体の持ち主でないと、奥深い山々を探索することはできない。十分に自由な時間を持つことができないと、逍遙を自らの性とすることはできない。

近場の「遊」では、「広い見聞」が得られず、短時間の浅い「遊」では、「奇勝」を得ることができず、簡便な

「遊」では、のびのびとした心情を得ることができず、大勢でざわざわとした「遊」は、長時間つづけることができず、大勢でざわざわとした「遊」は、長時間つづけることができない。

我が身を俗世間の外に置き、あらゆる仕事も義務も捨て去って、一人意のままに行くのでなければ、それを「遊」と言ったとしても、真の「遊」とは言えない。

【第二節】先人と私の「遊」

私は、昔の先人たちが記した遊記を読み、私自身が実見し体験したことに照らして調べたところ、彼らの記事は、鍋の中の一切れの肉を食べて料理全体を味わったように思ったり、書籍の一節を読んだだけで全部を理解したように思うように、一部を体験しただけで全部を理解しているつもりになっているものばかりだった。家の門口をうろついでいて、部屋の奥深くまで至ったものは少なかった。

それに対し、私自身の「遊」は、必ず高い所は極め尽くし、深い所も窮め尽くすものであった。西洞庭山の林屋洞³では、最奥部の隔凡洞へ至ったし、雁蕩山では、西外谷の最高部である雁湖を目にするまで登り続けた。勞山⁴では、高所にある華楼の山頂まで登ったし、羅浮山⁶では、最高峰の飛雲峯¹⁰の頂上で宿泊した。このように、自分では究極を窮めたと思っていた。

【第三節】徐霞客の「遊」

ところが、徐霞客の遊記を読んでからは、¹¹自分の傲慢さを羞じ、へりくだって陳謝する思いになった。

徐霞客の「遊」は、中国中央部におけるものは、他の人よりもそれほど優れているわけではない。そのめずらしく素晴らしいものは、福建・広西・湖南・四川・雲南・貴州におけるもので、南方の蕃族が住む辺境の地を、いくども往還するものであった。お上が整備した道ははずれることとなったとしても、名勝があると聞けば、その都度、遠回りをしてでも、曲がりくねった道でも構わずに、その地を探し求めた。

その方法は、まず山脈がどこからどこへ去来しているか、水脈がどのように分岐・合流しているかを観察する。そうして地勢のあらましを把握した上で、ひとつひとつの丘や谷について、その細かい支節まで調べ求めるといふものだ。道なき山を登り、生い茂った藪や密生する竹林¹²であつても、必ず押し破って登った。渡し場のない川でも、大波の急流や凶暴な早瀬をもとせず、必ず渡り通した。危険な峯でも、躍り上がってその頂に至った。奥深い洞穴でも、猿のようにぶらさがり、蛇のように身をくねらせて匍匐前進し、脇の小さな穴まで窮めないものはなかった。

道が行き止まりでも憂慮せず、道筋が間違つていても後悔しない。暗くなれば野宿もいとわず、空腹になれば草木の実でも食した。風雨に歩みを止めることもなく、虎狼が出たと聞いても恐れることなく進み続けた。行程の期限を設けず自由に進み、旅の道連れも求めず単独で旅をした。生まれたままの心で「遊」し、命をかけて「遊」した。

このような「遊」をなしたものは、古今、徐霞客ただ一人である。

「第四節」錢伝の誤りと徐霞客の西南遊

以前、錢謙益は徐霞客のひととなり「奇」とし、彼の伝記（以下「錢伝」）を書き、その一生の概略を明らかにした。しかし、錢は「遊記」を読んでいないようで、「錢伝」の記事で事実と異なるところがある。私が「徐霞客遊記」を入手して読んだところ、「錢伝」にいう「玉門関を出たこと」「崑崙山に至ったこと」「星宿海を窮めたこと」等は書かれていなかった。徐霞客の足跡は、雲南の鶏足山にとどまるものであった。

徐霞客が、広西貴州雲南の土司や蕃族の間を出入したところと、瀾滄江と金沙江沿いに廻行したり、南北両盤江の江源を窮めたことは、中国中央部の人として、初めてなした偉業である。彼の「遊記」を読むと、中国西南地域が広い

こと、山川の「奇」が中国中央部よりも遙かに多いことがよく分かる。

「第五節」「遊記」

「遊記」の文章は、日を追って順序立てて記述されている。情景をありのままに叙述しており、文学的な雕琢は全く加えられてない。それでいて天然の韻趣が流れるようで、驚嘆すべき自然界の事物や、山川の筋道が、目の前に並べられているかのようにありありと分かる。土地の風俗や人情、関門と橋梁や険峻の地に設けられた寨など、どれもはっきりと目に見えるようである。従来 mountain 志や地誌のたぐいの誤りを、あますところなく修正している。

珍しい事績や普通とは違う話など、次から次へと記されている。しかし、人が知らないことをいいことに欺くような、怪しく正しくない事柄や度を越えた誇大な話は決してないのである。

私は、徐霞客の「遊」においては、広大なエリアを遊行したことに感服するわけではなく、詳しく細かく遊行したこと16に感服している。また彼の「遊記」においては、幅広いことを述べていることを評価するのではなく、真実を追究して記述していることを評価している。

錢謙益が「古今の遊記の第一」と評価するのも、誠19にそ

の通りである。

「第六節」徐霞客の「遊」の目的

ある人が言う「張騫と甘英が西域を歴訪したのは、属国である都市国家と通じるためである。玄奘が天竺に遊行了たのは、仏典を求めるためである。都実がチベット西部の辺境の地に至ったのは、河源を窮めるためである。それに對し徐霞客は、いったい何のために遊行了たのだろうか」と。

私が考えるに、徐霞客は何かのために遊行了たのではなく、遊行するために遊行したのである。だから志を遊行に専念できたのである。志を遊行に専念できたので、行動を自分ひとりで決めることができたのである。行動を自分ひとりで決めることができたので、行き来は自由であり、自分の意のままにならないことはなかったのである。

「第七節」唯一の、畸人徐霞客、奇書遊記

造物者は、かつては、山川の靈異を久しく秘密にして人々に広まらないようにしていた。そこで、この人を遣わして、山川の靈異を掲げ明らかにさせようとしたのだろうか。

要するに、この世界において、徐霞客という畸人の登場は必然だったのであり、「徐霞客遊記」という異書が書か

れるのも必然だったのだ。

誠に残念なことは、私自身は既に年老いて衰えてしまい、裾をからげて袂を奮って立ち上がり、再び旅に出て、徐霞客の残した素晴らしい足跡を再踏破することができないことだ。そのため、「奇」なる「遊」の名を、徐霞客だけが永遠に冠することになってしまったのだ。

序注

【1】原文「嘗一鱗」鱗は魚肉の切り身。「淮南子・説山」に「嘗一鱗肉、知一鑊（鍋の意）味」とある。「淮南子」の原意は「一を知って十を知る」というプラスの意味であるが、ここは、「一部しか知らないのに全体を分かった気になっている」というマイナスの意味に解した。

【2】原文「披一節」披に書物をひもとくの意があるため、こう解した。

【3】林屋 江蘇省太湖に浮かぶ西洞庭山にある洞穴。唐杜光庭「洞天福地岳瀆名山記」十大洞天に「第九、林屋洞左神幽虚天」とある。

【4】隔凡 林屋洞最奥部にある支洞。清金友理「太湖備考」卷六古跡に「林屋洞、在西山。明蔡昇「震沢編」：洞中：有石門、名隔凡」とある。林屋隔凡に関する潘耒の詩は、彼の詩集である「遂初堂詩集」（以下「詩集」）卷二に「林屋」があり、「石門古篆題隔凡、水底風湍頭上走」の句が

ある。「詩集」は、詩作年ごとに編まれており、その年に訪れた地方の名を篇名に冠する。例えば、卷十一は一六九七年の作品を取録するが、その年に訪ねた黄山廬山にちなみ「黃廬遊草」の名を冠する。ここからその詩が取録されている篇により、潘がその場所を訪れ、詩を作成した年代が推測される。「林屋」は、一六七二年から七八年の作を取める卷二「少遊草下」にあり、潘はこの期間に林屋洞を訪ねたと推測される。潘耒の文としては、彼の文集である「遂初堂文集」（以下「文集」）卷十四に「遊西洞庭山記」があり、「洞門右高処、有隔凡字。相伝為徐武功書」「隔凡深処、人所不能遊、…而余皆縱遊之」とある。

【5】雁蕩 浙江省温州市にある丹霞地貌の山。

【6】雁湖 雁蕩山の西外谷、雁湖岡の上にある湖。海拔九九〇メートルにある。清曾唯輯「広雁蕩山志」卷二山水西外谷湖に引く清施元孚「雁蕩志」に、「本名雁蕩、在西外谷絶頂、其体円、縦横各三里、周遭高起如堤」とある。雁蕩雁湖に關する潘耒の詩は、「詩集」卷九「台蕩遊草」（一六九一年の作）に「雁山百詠」があり、その中に「雁湖」十首、「自性沙彌導游鴈湖酬之」二絶がある。文は、「文集」卷十三に「遊雁蕩山志」がある。僧侶自性の導きで、険しい岩を登り、雁湖に達したことを述べる。

【7】勞山 山東省即墨縣東南の海浜にある仙山。

【8】華樓 勞山山頂にある岩。明黄宗昌「嶗山志」卷三名勝に「華樓：畢登、有石似樓、是以名之。…碑書海上名山第

一、信不誣」とある。勞山に關する潘耒の詩文は「詩文集」に見えないが、青州（山東）に關わる詩が、卷八「海岱遊草」（一六八九年の作）に數編存する。

【9】羅浮 廣東省增城縣東部の道教の山。東晋の葛洪が仙術を得た所と伝える。

【10】飛雲 羅浮山最高峰。清宋広業「羅浮山志會編」卷首「羅浮山図贊」飛雲峯説に「在羅山絶頂、其峯廬天、晴霽常有雲氣」、卷三地理志名勝三壇觀に「飛雲頂有神仙聚會壇」とある。羅浮山飛雲峯に關する潘耒の詩は、「詩集」卷十三「楚粵遊草下」（一六九九年夏、一七〇〇年の作）に「望羅浮作」がある。文は「文集」卷十三に「遊羅浮山記」がある。危険だとして登山の中止を勧告されるが、「遊羅浮而不登飛雲、猶不遊也」として登山を決行。最高

処に至り、四方を限りなく見渡せたと述べている。

【11】潘耒が「徐霞客遊記」を読んだ時期やこの序を撰した時期は不明だが、羅浮山遊行の一七〇〇年（五五歳）から、没年の一七〇八年（六三歳）の間と推測される。

【12】原文「菁」 滇黔一帯では、山間の大竹林の意。

【13】原文「錢牧齋」 諱は謙益、牧齋は号。一五八二〜一六六四年。明末、礼部尚書に至ったが、清の江南平定に及び清に仕えた。徐霞客とは交友關係があった。

【14】「徐霞客遊記」の刊行は、乾隆本が最初であり、潘が読んだのは、それ以前に存した抄本のひとつであろう。

【15】「錢伝」に「由雞足而西、出石門関數千里、至崑崙山、

窮星宿海」とある。「錢伝」は陳函輝の墓誌銘を素材としているが、陳墓誌銘も同文。「潘序」は「石門関」を「玉門関」と誤っている。

【16】瀾滄江 メコン川上流の中国での称。次の金沙江とあわせて、徐霞客は川筋をたどり考察を加えている。

【17】金沙江 長江の上流の雲南での称。

【18】南北盤江 広西壮族自治区の川。二筋の盤江があり、それらの違いと流れについて、徐霞客は遊記の中で追跡するとともに、「盤江考」一編で考察している。

【19】「錢伝」に「当為古今遊記之最」とある。

【20】原文「或言」。「あるひと」は不詳。あるいは潘耒が自ら問いを立てているのかもしれない。

【21】張騫 前漢の人。武帝の命で中央アジアの大月氏へ使いし、途中で匈奴に捕らえられるなどしたが、十三年後に帰還し、西域に関する貴重な情報をもたらした。

【22】甘英 後漢の人。西域都護班超の部将。超の命を受け、シリアに至り、西アジアに関する情報をもたらした。

【23】玄奘 唐の僧侶。中央アジアを経てインドに入り、大量の仏典を得て中国へ帰還した。

【24】都実 元の人。フビライの命を受け、一二八〇年に河源の探索を行った。その結果を、潘昂霄が「河源志」にまとめ、その一部が「元史・地理志」に「河源附録」として掲載されている。そこには「河源在土蕃朶甘思西鄙（チベット）の朶甘思元帥府の西鄙」とある。

【25】原文「吐蕃西鄙」吐蕃は、七〜九世紀に、チベット地域を支配した王朝名。のちチベット地域に対する中国人の呼称となった。

【26】原文「果何所為」前文で、張騫らの遊行に目的があったことを述べていたので、ここの「所為」も、具体的な「遊行」であると判断した。

【27】原文「夫惟無所為而為」「夫れ惟だ為す所無くして為す」と訓読した。遊行の目的が話題になっただけで、「無所為」は「遊行が無い」ではなく、「目的が無い遊行」と解し、「遊行それ自身が目的だ」と意識した。末尾の「為」を「遊行する」と解した。

第二部 論考篇

一 はじめに

梁啓超（一八七三〜一九二九）は、伝統中国の學術や文化を科学的研究方法で捉えたという点で、先駆的存在であるが、徐霞客の「遊記」（以下「霞客遊記」）に注目したという点でも近代最初の人である。

『中国近三百年學術史』（一九二六）⁽¹⁾は、『清代學術概論』（一九二二）と同じく清代の學術を対象とするが、明末二三十年と連続する清代學術史を構想する。冒頭の「反

「動と先駆」で、明代末期に陽明学末流の弊害への「反動」が起り、そこから新しい思潮につながる「先駆」が生まれたとする。そして具体的な反動の一つとして「自然界探索の反動」をあげ、「明末に二人の怪人が現れて怪書二部を残した」とし、宋応星とその著「天工開物」と並べて徐霞客と「霞客遊記」をあげる。さらに「清代学者旧学整理の総成績(三)」「地理学」でも、「科学精神を以て地理を研究し、すべて実測を基礎としている」として、徐霞客をその科学性・先駆性の点から高く評価する。

梁はこの他に、潘耒の「徐霞客遊記序」(以下「潘序」)を見だし、紹介したという点でも、徐霞客研究において重要な役割を果たした。

第二部では、「潘序」を通して潘の徐霞客評について考察するが、あわせて清末の李慈銘の徐霞客評についても触れる。

二 「潘序」の顕彰―梁啓超と丁文江―

まず梁が「潘序」を紹介した経緯を確認しておく。

「霞客遊記」は、徐霞客没(一六四一)ののち、長く抄本としてのみ伝えられ、初めて刊に付せられたのは乾隆四一年(一七七六)であった(乾隆本)⁽⁴⁾。その後幾度か刊行

されたが、乾隆本の翻刻の域を出るものはない。

民国に入ると、一九二四年に、沈松泉⁽⁵⁾が、自ら点校を施した初の活字刊本を刊行した(沈松泉本)⁽⁶⁾。これは、学術的なテキストとして初めてのものである。

沈に序を乞われた梁は「梁任公先生代序」(以下「代序」)を記し、「序に代えて自分が見いだした潘耒の旧序を示して責を塞ぎたい」とし、「潘序」の全文を掲載する。

そして「潘序」を収録する「遂初堂集」が稀覯本であること、他の「霞客遊記」の本に「潘序」を載せるものがないことから、ここで「潘序」を紹介する意義があると説く。

また「霞客遊記」研究の第一人者である丁文江が、「潘序」に接して「欣喜讚歎」し、優れた作品であると評価したと述べ、「潘序」の価値を強調する。この沈松泉本所載の梁「代序」が、「潘序」を掲載した最初のものである。

梁から「潘序」を教授された丁文江は、これを高く評価し、民国一七年(一九二八)に刊行した点校本(丁文江本)において、「潘序」を巻頭に掲げ、顕彰する。さらに「丁文江按」の一文を記して「潘序」への高い評価を記す。丁文公本は繰り返し翻刻され、「潘序」を掲載し続けた。

三 潘耒について

序の撰者潘耒について、簡略にまとめておく。

潘は姓、耒は諱。字は次耕等、晩号は止止居士、藏書室名は遂初堂等。江蘇省呉江の人。一六四六〜一七〇八年。

顧炎武らに師事し、博く經史歷算音楽に通じた。康熙一七年（一六七八）に官に招聘され「明史」の編纂に従事。同二二年（一六八三）に退官し、以後二度と仕官しなかった。若年より山川の遊行を好み、退官後の四〇歳過ぎから中国各地を遊行、江西山東浙江福建安徽湖南広東河南を歴遊し、詩と遊記を残した。同三四年（一六九五）に、師である顧炎武の「日知録」を刊行。同四二年（一七〇三）の康熙南巡の際に復官を勧められるも固辞。同四七年に六三歳で没。同四九年（二七一〇）に「遂初堂詩集十六卷 文集二十卷 別集四卷」が刊行され、のち「四庫全書」に入れられた。

四 「潘序」における徐霞客評

「潘序」の徐霞客評を本文に即して概説する。

まず、真の「遊」を行う条件として「俗世間から離れた心情」「頑強な肢体」「十分な時間」の三つがあるとす。

そして十分な「遊」でないものとして「近遊」「浅遊」「便

遊」「群遊」をあげる。このことは、逆に「遠遊（故郷から遠く離れたところを訪ねる遊行）」「深遊（時間をかけて深く探究する遊行）」「不便遊（煩雑さや遠回り、危険をいとわぬ遊行）」「孤遊（ひとりで行動を決められる遊行）」が、真の「遊」に近づく手立てだと言っていると見える（第一節）。

次に先人の「遊」はいずれも表面をなでた浅いものに留まっており、真の「遊」を行っていたものはいない。そして潘自らは、高い所も深い所も極め尽くす「究極」の「遊」をなしていた、と自負する（第二節）。

ところが、潘が「霞客遊記」を読んだところ、自分の自負が打ち砕かれてしまったとする。

ここで「霞客遊記」の構成について確認しておく。「霞客遊記」は大きく二部に分かれている。第一部は、遊記巻一にあたり、徐霞客五二歳以前の、中国の諸名山水を遊行した記録で「名山遊記」と呼ばれる。一回の遊行は数日間程度、比較的短文な遊記十七篇からなる。こうした遊記は、唐代以降の伝統的なスタイルであり、多くの文人が書き残しているものである。第二部が、遊記巻二から巻十にあたる長大な部分で、徐霞客が五一歳から五五歳にかけて西南部七省を巡った記録である。「西南遊日記」と呼ばれ、一

部失われているが、四年間ほぼ途切れることなく書き続けられた旅日記である。

潘耒はこの「西南遊日記」を「霞客遊記」の特徴を示すものだとする。潘はここに見られる徐霞客の「遊」を、まず「山脈がどこからどこへ去来しているか、水脈がどのように分岐したり合流しているかを観察」するものと把握している。そしてその遊行は、困難をもとめせず突き進むものであり、回り道もいとわず、自由に自分のままで遊行した「逍遙」なる「遊」であったとする。この点は第一節で述べた「不便遊」「孤遊」につながる評価である。そして徐霞客は命をかけて「遊」を行い「遊」に生きた、とし、こうした「遊」をなしたものは古今徐霞客ただ一人であると絶賛する（第三節）。

次いで、「錢伝」の誤りを指摘し、徐霞客の遊行は域外のチベットには至っていないとする。しかし「西南遊日記」を、西南地域のことを詳細にかつ正確に記したものとして高く評価する。この点は、第一節で述べた「遠遊」「深遊」につながるものであろう（第四節）。

次に「遊記」について、その文章は文学的な雕琢がない素朴な文体だが、まるで目の前に見えるような、写実性と詳細さがあるとする。記事としては、珍奇な話が多く収録

されているが、人を欺くような、誇大で非合理的な話はなく、真実を追求していると評価している（第五節）。

さらに、徐霞客の遊行の目的を考察し、「徐霞客は遊行それそのものが目的だったのだ」とする。だから遊行に専念でき、自分で行動も決められ、意のままに遊を楽しめたのだとする。この点は、第一節で述べた「孤遊」につながるものであろう（第六節）。

最後に、造物主が秘匿していた山川の靈異を、徐霞客が明らかにし、遊記を通して世に広めたことと絶賛し、自らが衰老して徐霞客の後を追えないことを嘆じて筆を置く（第七節）。

まとめると「潘序」は、徐霞客の「遊」が「遠遊」「深遊」「不便遊」「孤遊」を兼ね備えたもので、「自由」な「真の遊」であったと評価する。そして「霞客遊記」は「詳細」「真実」を追求たものであり、その文章は、写実性の高いものであるとして高く評価している。この他に、「霞客遊記」が山脈と水脈の把握を指向していることに注目していることも指摘しておきたい。

五 李慈銘「越縵堂讀書記」

本節では、清人李慈銘の「霞客遊記」評を検討する。

李は姓で、慈銘は諱。字は愛伯、号は純客。浙江省紹興の人。一八三〇—一八九四年。一八六一年の進士で、官は山西道觀察御史に至った。四一年間にわたり日記を書いており、死後、蔡元培により「越縵堂日記」の名で、一九二〇年に刊行された（商務印書館）。さらに由雲龍（一八七七—一九六一）は、日記から書評に関わる部分を抜き出し、書籍の分類ごとに編集し、「越縵堂読書記」（以下「読書記」と名づけて、一九五九年に刊行した（商務印書館）。

「読書記」で、「霞客遊記」を取りあげているのは、一八七〇年十一月二十三日条である。

「読書記」の前半は、全体の構成や附載の序文など、「霞客遊記」の概要を述べる。その中で、「この遊記は、日を追って記されており、南北などの道程を事実のままに記載している。文飾が全く施されておらず、帳簿のようである」と評している。

そして後半で、具体的に評を加える。以下訳を掲げる。

山水を描く文章は、必ず雕琢が施された洗練されたものであるべきで、高い山に登り淵に望むときの感興としては、大切なことはゆつたりとして情になつたものであるべきである。

しかし徐霞客は危険な険しいところに梯子を掛けて登ったり、我が身に不測のことへ挑んだりしている。徒に詭異なものを見ようとして目を標わせており、美を鑑賞しようという深みを持っていない。古人のように自然をたしなむ者は、決してこのようであってはならない。

そのうえ言葉は冗長で、文は粗略で稚拙。せつかくの異境は「奇」を失い、美しい場所はその「美」を覆い隠されている。

路程を記録しようとするものにとつては道筋を知る手立てがなく、名勝を訪ねたい者にとつては不満が残る。

加えて彼の興味は山脈水脈の方向（原文「脈絡向背」）にあつて、これは風水の術（原文「青鳥之術」）と同じである。この点は最も意味がないことである。

古今の地理についても、基づくものが全くなく、名勝や遺物などについても、ほとんど粗略な扱いである、

もとより明末の士人で読書人ではないので、考証学的なんたるかもわからないのである。

李の批判は、徐霞客の「遊」と「遊記」の両方にある。

「遊」の在り方として、文人たるもの、ゆつたりと自然の美を味わうべきなのに、徐霞客はことさらに危険を犯して

「奇」を探索しようとしている、と批判する。「遊記」としては、文飾がなく、冗長で粗略、稚拙だとする。さらに、徐霞客の興味が「山脈水脈の方向」にあることを風水の術と同じだとして、最も無意味だと手厳しく批判している。

六 潘の賞賛と李の批判―まとめに代えて―

以上、潘の「霞客遊記」評と、李のそれとを見てきた。通して見ると、「霞客遊記」の特徴を捉えることにおいて、実は両者には共通点があるものと思われる。

徐霞客の「遊」は、危険をもつとせず、山は頂を極め、洞穴は底を窮めるといふ徹底した詳細なものであるところに特徴があった。潘はそのことを賞賛し、李はそれが、文人の「遊」としてふさわしくないと批判する。「遊記」については、雕琢が施されておらず、目に見えることを写實的に記していくのが特徴であった。潘はそれがすばらしいといひ、李はそれが欠点だとするのである。

そして、霞客の興味関心が「山脈水脈」にあったとしても、両者は一致している。潘は、それが地域の全体像をつかもうとしているものだと評価するが、李は、「風水の術」に通じるとして、極めて否定的に評価しているのである。

潘は徐霞客とその「遊記」を賞賛し、李は逆に手厳しく批判した。しかし彼らが徐霞客と「遊記」の本質特徴として指摘していることは共通のものがあつた。その意味で、梁や丁が「潘序」は「霞客遊記」を正しく理解している」とした判断が正しいならば、李も「霞客遊記」を正しく読み解いていたと言えるのでないだろうか。

「霞客遊記」と山脈水脈との関わりについては、中国の学界などではほとんど語られない。李の言うがごとく、山脈水系の探究は、「風水の術」に通じるものである。徐霞客を、自然科学のひとつである「地理学」の「先駆者」として顕彰し、崇拜する現在の中国において、彼が占術に近いところにいたとする視点は到底受け入れがたいものなのかもしれない。しかし、徐霞客が「山脈水脈」という動的な「龍脈説」を抱いていたことは、中国全体の地理的構造を論じた、彼の小論「溯江紀源」に明らかであり、⁽¹²⁾「霞客遊記」に、山脈水系の記事が重要なものとして数多く記されていることは、潘や李が指摘するとおりである。こうした指摘に耳をふさぎ、徐霞客と風水術との関係はなかつたとしてしまうようでは、徐霞客研究は停滞から抜け出せないであろう。⁽¹³⁾

注

(1) 『支那近世學術史』と題した、岩田貞雄訳がある(人文閣、一九四二年)。

(2) 前掲注(1) 岩田訳による。

(3) 「潘序」について言及したものは、次節で扱う「梁任公先生代序」と「丁文江接」の他に、黄明泉「潘未与《徐霞客游記》」『徐霞客研究』第六輯(学苑出版社、二〇〇〇年)がある。この論文は、丁の「潘序」への高評価を紹介した上で、「潘序」の「清華の所在」を検討したとしている。ただ「検討」とはいつても、「潘序」の文章を切り分けて、原文そのまま並べ替えたものに留まる。また黄実「沈松泉校点《徐霞客遊記》史料 劉瑞升輯」『徐霞客研究』第十五輯(学苑出版社、二〇〇七年)は、劉瑞升が入手した「沈松泉本」に収載されていた、丁文江撰「徐霞客遊記」という一文を紹介する(この一文は、埼玉大学所蔵の「沈松泉本」には収載されていない)。その中で丁は、徐霞客のチベット行きの実偽を再検討し、「潘序」が正しいことを明らかにしている。そして「二百八十年來、ただ潘未だけが霞客先生の「知己」だといえる」とする。

(4) 「霞客遊記」のテキストについては、拙稿「徐霞客遊記のテキストについて」『埼玉大学紀要(教育学部)』(六六卷二号、二〇一七年)参照。

(5) 生年、諸説あり(一八九六・一九〇〇・一九〇四)。没年、一九九〇。江蘇吳郡の人。一九二五年、張靜廬・盧芳らと

ともに上海に光華書局を創設。「新思想の紹介と新文化の宣揚」をうたい、文芸學術に関する書籍雑誌を刊行した。郭沫若なども執筆陣として参加したが、一九三五年に閉店した。(朱聯保『近現代上海出版業印象記』「学林出版社、一九九三」、陳玉堂『全篇増訂本中国近現代人物名号大辞典』「浙江古籍出版社、二〇〇五」、吳永貴『民国図書出版史編年』一九二二〜一九四九』「社会科学文献出版社、二〇一八」等による。)

(6) 上海群衆図書公司刊。表紙に「新式標点」とあり、本文に句読点や固有名詞符号を施した、「読める」本を指向している。劉瑞升「徐霞客遊記」版本散記『徐霞客研究』第十七輯(地質出版社、二〇〇八年)によれば、一九二四年以後に、丁文江撰「徐霞客遊記」等を収録した別の版が作られたようである。

(7) 一八八七〜一九三六年。江蘇省泰興県の人。グラスゴウ大学で動物学や地質学を学び、帰国後は地質学を中心とした研究と教育に携わる。一九三一年に北京大学地質系教授。もともと洋学の人で国書はほとんど読んでいなかったが、雲南での現地調査中に、「霞客遊記」を見て、眼前の光景と「遊記」の記述が一致していることに感嘆し、遊記研究に進むことになる。一九二八年、年譜と地図を併載した点校本を商務印書館から刊行した。(重印徐霞客遊記丁自序」等による。)

(8) 梁は「潘序」の「最注意」として、徐霞客のチベット行

きに関する「錢伝」の誤りを正した点をあげる。

(9) 梁は「丁が作成した徐霞客の詳伝がまもなく出版される。沈松泉本は、丁作成の伝記とともに、学界で歓迎されるだろう」と、沈の仕事褒めて「代序」を結ぶ。しかし、沈松泉本刊行四年後の一九二八年に丁文江本が刊行されると、こちらが最良のテキストとして流布し、沈松泉本は忘れられてしまった。

(10) 丁は、「潘序」の価値として、①霞客の遊は、余人がなしえぬもので「恆古以来一人而已」を明らかにしたこと、②「錢伝之誣」を弁じ霞客先生の「文章之真」を証明したこと、③霞客先生の「求知」の趣旨を「無所為而為」と描き出したこと、の三点をあげる。

(11) 一九八〇年、上海古籍出版社より、褚応寿と呉紹唐が整理した点校本が出版された(上海整理本)。この本は、質量ともに、現在の最良のテキストである。そこでは、「潘序」は他の序とともに「旧序・校勘」にまとめられて本の末尾に置かれ、優位性を失っている。また上海整理本では「丁文江按」も削除されている。

(12) 「湖江紀源」については、拙稿「徐霞客遊記訳注稿 散文篇(一) — 『湖江紀源』」(埼玉大学紀要(教育学部) 六五巻二号(二〇一六年)、徐霞客を含む明代士人の龍脈説については、拙稿「明代士人の龍脈説—風水説との関わりで—」(『東方宗教』一三二号(二〇一八)参照)。

(13) 欧米の研究者は、徐霞客を「科学の先駆」占術から遠

い」とする桎梏から自由である。英国の Julian Ward は著書『Xu Xike (1587-1641): the art of travel writing』において「霞客遊記」を取りあげ、Chapter VI Mountains and Caves の “Fengshui and the Dynamism of the Landscape” の節で徐霞客と風水説との深い関わりについて論じ、 “Mount Chickenfoot” の節で徐霞客が雲南の鷄足山について風水説に基づいて記述をしていることを指摘している。

(埼玉大学)